

# 情報活用能力の指導状況の共有を出発点に、教科横断での指導の実現を目指す

## 東京都・私立山崎学園富士見中学校高校

探究学習において生徒の情報収集が限定的であることに課題意識を持ち、学校全体で情報活用能力を育成する必要性を感じていた東京都・私立山崎学園富士見中学校高校。まずは各教科・科目の指導状況を見える化するために、「情報活用能力指導状況記入シート」を作成。同シートを通じて、各教科・科目の実践内容を共有し、担当教科・科目の指導の見直しにつなげている。また、授業づくりを司書教諭と連携して行い、生徒が信頼性の高い情報を収集し、活用するよう、支援している。

### 注目ポイント

- ✓「情報活用能力指導状況記入シート」で各教科・科目の実践内容を見える化して共有
- ✓「公共」の授業では、平和をテーマにした意見文の作成過程で様々な情報活用の場面を設定
- ✓高校3年生が探究学習で作成した論文の英文要約において、生成AIを補助的に活用

自校が育成を目指す「情報活用能力」  
信頼性の高い情報を収集し、活用する力を育む

東京都・私立山崎学園富士見中学校高校は、中高一貫教育を行う女子校だ。2017年度、探究学習のカリキュラムの作成にあたり、探究委員会（現・教育研究部）を設置して、自校で育成を目指す資質・能力を検討し、「自分の意見を形成する力」「聴く力」など、「17の力」（図1）を策定した（\*1）。そのうちの1つが、「様々な情報を収集し、必要な情報を選択する力」と定義された「情報を活用する力」だ。善本久子校長は、「17の力」を設定

してから8年経った今、「情報を活用する力」を育成する重要性はますます高まっていると指摘する。

「物事を調べることに手間も時間もかかっていた時代は、人が知識を記憶していることには価値がありました。しかし、情報技術の発達により、物事はインターネットで調べればすぐに分かる時代になりました。そうした時代に求められるのは、知識を組み合わせる思考し、0から1を生み出す『創造』です。種類も質も様々な情報があふれる中で、複数の情報源から信頼性の高い情報を収集し、それを正しく活用する力を育むことが、これからの学校教育では一層重要だと考えています」

図1 富士見で育む「17の力」

#### 自分と向き合う力

- ①自分の意見を形成する力
- ②チャレンジする力
- ③計画を立てる力
- ④やり遂げる力
- ⑤自らを振り返る力

#### 人と向き合う力

- ⑥聴く力
- ⑦人を巻き込む力
- ⑧人とつながる力
- ⑨話し合う力
- ⑩発表する力
- ⑪記述する力

#### 課題と向き合う力

- ⑫課題を発見する力
- ⑬情報を活用する力
- ⑭多角的に考える力
- ⑮論理的に考える力
- ⑯創造する力
- ⑰社会に貢献しようとする力

下線は、図2の「指導場面」でひもづけられている資質・能力。  
※学校資料を基に編集部で作成。下線は編集部によるもの。

### 学校全体の取り組み

生徒の情報収集が限定的である現状を共有し、課題意識を高める17年度に探究学習のカリキュラム作成に着手し、実践を進めてきた同校だが、探究学習のみで「17の力」を育成するのは難しいことに気づいたと、教育研究部主任の三浦佳奈先生は語る。「週1時間の探究学習だけでは、目標とする到達レベルの力を育むことは難しく、様々な教育活動の中で日常的

\* 1 同校の探究学習に関する取り組みは、本誌2019年度12月号の「改革事例から導く！『学校教育デザイン』を描く道標」のコーナーで紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」([https://view-next.benesse.jp/view\\_section/bkn-hs/article04653/](https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article04653/))、または右の2次元コードからアクセスしてください。



# 情報活用能力を学校全体でどう育成するか？

に育成する必要性を感じました。中でも情報活用能力は、各教科・科目の授業で育成できるため、情報活用場面を意識的に設けるようにすることを校内で共有しました」

しかし、生徒の情報活用能力は、思うように高まらなかった。司書教諭



校長  
**善本 久子**  
よしもと・ひこ子  
同校に赴任して2年目。



教育研究部副主任  
**三浦 佳奈**  
みつら・かな  
同校に赴任して19年目。  
社会科。



教育研究部副主任  
**宗 愛子**  
そう・あいこ  
同校に赴任して10年目。  
司書教諭。

## 学校概要

**設立** 1940（昭和15）年  
**形態** 全日制／普通科／女子校  
**生徒数** 1学年約240人  
**2024年度卒業生進路実績** 国立大は、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京科学大、東京農工大、横浜国立大、名古屋大、東京都立大などに31人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ766人が合格。専門学校進学1人。

として情報活用能力の育成に携わってきた教育研究部副主任の宗愛子先生には、次のような課題意識があった。

「卒業生が探究学習の中で作成した論文の参考文献を示すことで、書籍や新聞、研究論文など、多様な情報源があることを伝えるなど、情報収集の方法は中学1年次から継続的に指導してきました。しかし、インターネット上で必要な情報が見つからなければ、それ以上は調べようという生徒が少なくありませんでした。情報源の違いによって、調べ方も、得られる知見も変わることから、多様なメディアを主体的に活用する力の育成が不可欠でした」

そこで24年5月、教育研究部は職員会議で、学校全体で情報活用能力を育成する方針を改めて発信。各教科・科目における情報活用能力の指導状況を見える化して共有することを提案した。具体的にはまず、情報活用能力とは、探究のプロセスを支える汎用的なスキルであり、かつ、各教科・科目の学びを支える基盤であることを、具体的な授業場面を通じて改めて説明。そして、表計算ソフトで作成した「情報活用能力指導状況記入シート」（以下、シート）をクラウドにアップし、各教師が指導した項目を入力するようになった。

しかし、そのシートでは各教科・科

図2 「情報活用能力指導状況記入シート」(抜粋)

指導場面			(1) 問いを立てる (テーマは何ですか。どのような指導をしていますか)	(2) 情報を集める (どのような資料をどのような方法で集めていますか。どのような指導をしていますか)	(3) 情報を整理・分析する (どのように整理・構造化させていますか。どのような方法・観点で比較・評価させていますか)	(4) 表現・発信する (どのような表現活動を取り入れていますか)
「17の力」で該当する力			⑫課題を発見する力	⑬情報を活用する力	⑭多角的に考える力、 ⑮論理的に考える力	①自分の意見を形成する力、 ⑩発表する力、⑪記述する力
入力例			例：〇〇を課題に設定し、マッピングさせ、それを基にグループで探究する問いを選び、仮説を立てさせた。	例：教科書、気象庁のウェブサイト、新聞記事、地域の防災パンフレットなどを紹介し、情報カードに書くよう、指導した。	例：主食が異なる2か国を選ばせ、地理と気候の観点で比較させた／ウェブ記事と新聞記事の情報の信頼性を比較させた。	例：提案をスライドにまとめ、グループで発表させた。意見文も個人で提出させた。
活用する手法・資料等の例			手法例：ブレンストーミング／マッピング（5W1H・Qワードなど）／ハテナソノ／マングラート	資料例：教科書・資料集／辞典・事典／本／新聞（紙）／雑誌（紙）／論文／行政資料／白書／パンフレット類／統計／データベース	思考ツール例：マトリックス／分類／比較対照／原因と結果／影響／対策／連鎖／時系列変化	表現活動例：ポスター、スライド、新聞、動画／掲示、プレゼンテーション、ワールドカフェ形式／演劇
学年	教科・科目	単元名	4つの地域の担当を割り振り、各国の気候変動に関する「現状の課題」と「解決策」を教科書から読み取らせた。（6月）	教科書の内容に加え、インターネットで各国のデータを調べさせた。（6月）	「現状の課題」と「解決策」の2つの視点で情報を整理して、スライドにまとめさせた。（6月）	それぞれの地域を担当した4人を1つのグループにし、「現状の課題」と「解決策」を英語で説明させた。（6月）
高1	英語コミュニケーション Bグレード	We can make a difference				
高2	公共	「正しさ」を考える一私たちの価値観と選択		グループごとに割り振った社会問題（ヘイトスピーチの罰則化、選択的夫婦別姓の法制化、同性婚の法制化）に関する資料（新聞記事、書籍など）を配布し、その問題の現状や論点などを情報カードに書かせた。（5月）	授業で学んだ功利主義、義務論、ロールズの正義論、ミルの自由論の4つの視点で社会問題を分析させた。（5月）	グラフィックオーガナイザーを使ってまとめ、その内容を基に発表させた。（6月）
高2	家庭基礎	家族に関する法律		選択的夫婦別姓制度の導入に関する日本や海外の現状について、教科書・新聞記事・インターネットを用いて情報収集をさせた。（5月）	正確な数値を用いて、整理させた。（5月）	3人1組でマイクロディベートを行った。全員が賛成・反対・審判のすべての役を担うことで、それぞれの立場で考えられるようにした。（5月）

※学校資料を基に編集部で作成。同校のシートは学年ごとに分かれているが、ここではまとめて例示している。

目での具体的な指導内容までは把握できなかった。

そこで25年度はシートを改訂。(1)問いを立てる、(2)情報を集める、(3)情報を整理・分析する、(4)表現・発信するという探究のプロセスごとに指導内容を入力する形とし、各指導場面で育成したい力を「17の力」(P.10図1の下線)とひもづけて示した。記入例も充実させ、6月の職員会議で、授業での実践を入力してほしいと依頼した。

そして7月中旬、各教師が入力した指導の状況を、宗先生が学年ごとに教科・科目順に並べ換えて校内で共有(P.11図2)。7月末の各教科会では、それを基に情報活用能力の育成について話し合うことにした。三浦先生が担当する社会科では、各学年の実践を見ながら話し合った。

「他の教師の入力内容を見て、『自分もこんな実践をした』、『2学期にこういう実践をしたい』といった話が出ました。『社会科では地図や写真、データなど、様々な形態の情報を扱うのだから、情報活用能力を今以上に育成していけるはずだ』と確認しました(三浦先生) 教師の意識が情報活用能力の育成に向き始めたのは、職員会議で生徒の現状を共有したことが大きかったと、宗先生は語る。

「職員会議では、検索サイトでの検索結果の上位に表示される生成AIの要約をそのまま書き写す生徒が少なくない状況を取り上げ、学校全体で情報活用能力の育成を強化する必要がある、そのための第一歩として、各教科・科目での指導を見える化したいと伝えました。先生方も授業の中で同じような場面を目にしていたので、提案への共感を得られたのだと思います」

三浦先生も、目的を共有できたことが取り組みの推進力になったと語る。

「生徒の現状を共通の認識としたことで、学校全体として情報活用能力の指導をレベルアップする必要性を確認できました。さらに、シートの活用が、情報活用能力を教師間の共通言語にすることに繋がりました」

#### 教科・科目の指導事例 「公共」

### 意見文の作成の過程に、情報活用場面を組み込む

三浦先生が担当する高校2年次の「公共」では、沖縄とパレスチナの現状を学んだ上で、平和をテーマに自分で問いをつくり、その問いを考えるための情報を収集・整理して新聞に投稿する意見文を書くというプロジェクト型学習の授業を行った(図3)。

図3 高校2年次「公共」「私たちの声を伝えよう! 沖縄とパレスチナから考える平和」指導案(全15時間)

- ねらい
  - ・社会の課題を明らかにする
  - ・複数のメディアから信頼性の高い情報を収集する
  - ・発信する責任を意識する
- 学習の流れ
  - ① 沖縄とパレスチナの現状を知る
  - ② 「平和」をテーマに問いをつくる
  - ③ 情報を収集する
  - ④ 情報を整理・分析する
  - ⑤ 意見文を作成して発信する(新聞社に投稿)

※意見文の文字数: 宗先生が作成した各新聞社の特徴をまとめた資料を読んだ上で、生徒が各自、投稿する新聞社を決め、その新聞社の投稿欄の制限字数を意見文の文字数とした。

#### ■授業計画

時数	学習内容
1・2	沖縄の現状
3	日米安全保障体制
4・5	パレスチナ問題
6	グループワーク(戦争と平和を倫理学の視点で考え、話し合う)
7	個人ワーク(平和をテーマに問いづくり、情報収集)
8・9	日本の平和主義
10	個人ワーク(情報の整理・分析、意見文の作成)
11	国際社会と国際法
12・13	国際連合
14	意見文を読み合い、フィードバックし合う
15	意見文完成・提出

※学校資料を基に編集部で作成。



写真1 生徒は、インターネットや書籍など、様々なメディアを活用して、自分が立てた問いについて調べた。

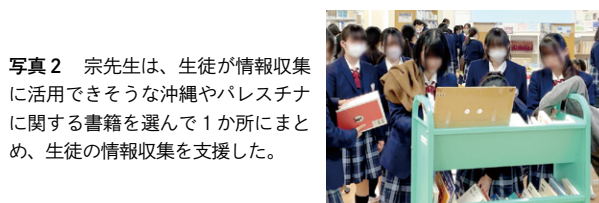


写真2 宗先生は、生徒が情報収集に活用できそうな沖縄やパレスチナに関する書籍を選んで1か所にまとめ、生徒の情報収集を支援した。

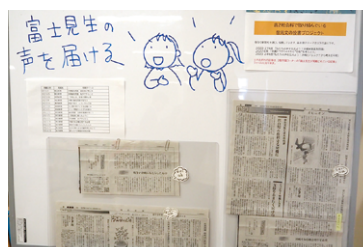


写真3 宗先生は、掲載された新聞記事の切り抜きを掲示。それを見て、自分も投稿しようとする生徒もいる。



授業開始の約3か月前から宗先生に相談し、指導の流れや教材・資料を協働して作成した。戦争と平和を題材にした理由を、三浦先生はこう説明する。

「戦時下では情報は統制されるものであり、平和を考える上で情報活用は重要な意味を持つと考えました。生徒は普段、SNSを使って情報収集をしています。そこで授業では、書籍や新聞など、SNSとは違うメディアで情報を収集する場面を設定しました。平和について考えてほしかったのはもちろんですが、真摯な姿勢や倫理観が求められるテーマにすることで、生徒が信頼性の高い情報を収集しなければならぬ必要性を強く意識することを期待しました。実際、多くの生徒が書籍や新聞から情報を得ていました」

生徒がすぐに書籍を探したり、新聞のデータベースを検索したりするところができるよう、授業は「Learning Hub」(\*2)で実施(写真1)。また、活用できそうな書籍を宗先生が数十冊選んだり、信頼性の高いウェブサイトの一覧を作成したりして、生徒の情報収集を支援した(写真2)。

情報源にした資料は、生徒それぞれがクラウドの記録シートに入力。学習評価の際、意見文の内容と情報源にした資料を照らし合わせることで情報活

用の状況を推測し、評価した。

意見文の投稿を単元目標としたのは、SNSを中心に無責任な発信が社会問題になっている中で、採用されれば名前が掲載される新聞への投稿を通じて、発信には責任を伴うことを経験させたいと考えたからだ。投稿は生徒の任意だが、毎年数人が新聞に掲載されている(写真3)。授業後も投稿を続ける生徒もいるという。

今後の課題は、収集した情報を整理・分析する時間の確保だ。

「単元の最初には、主に講義を通じて戦争の事実を伝えます。生徒が初めて知る衝撃的な内容も多く、講義を踏まえて『問いを立てる』ことに多くの時間をかけているのが現状です。収集した情報を整理・分析し、より深い意見文を書けるような指導ができるよう、単元の指導計画も見直していきたいと思っています」(三浦先生)

#### 生成AIの活用

生成AIを補助的に使い、探究学習の論文を英語で要約

25年度は、高校3年生が探究学習で作成した論文を英語で要約する活動において、補助的に生成AIを活用した。具体的には、生徒自身が英語で要約を

書いた上で、うまく書けなかった部分や表現が気になった部分の日本語の文章を生成AIに入力し、生成AIが作成した英文を参考に生徒が修正するという手順だ。生徒が一度自分で英文を書いているからこそ、生成AIが作成したよりよい英語表現が自分のものとなり、英語力の向上につながった。

授業での生成AIの活用にあたり、5月、高校3年生を対象に、生成AIの活用の利点とリスク、ルールをテーマに、外部講師による講演会を実施。教師に対しては5月に2回、生成AIの活用体験会を開き、生成AIの活用が未経験の教師に、生成AIで何ができるのかを体験してもらった。その上で、8月末には全教師を対象に、生成AIが浸透した時代に生徒に育むべき資質・能力や授業づくりをテーマとした校内研修を実施した。

#### 成果と展望

年度末に各教師の実践を整理し、教科横断での指導につなげる

「情報活用能力指導状況記入シート」への入力は、2学期以降も継続する。9月の職員会議では、7月の各教科会で話した内容を共有して2学期での実践につなげ、さらに年度末には、学年

別・教科別に整理した内容を全教師で共有する予定だ。そうした取り組みを通じて教科・科目間に共通する指導の観点を見いだし、将来的には教科横断的な授業の実践へと発展させたいと、三浦先生は考えている。

「シートから、『家庭基礎』と『公共』が同時期に選択的夫婦別姓制度について扱っていたことがわかりました(P.11図2)。今後は教科横断のテーマを設定し、それぞれの教科ならではの視点を通じて、情報活用能力もより効果的に育成できればと思っています」

宗先生は、生徒が各教科・科目で学んだことを探究学習での学びに生かしているよう、教師が教科・科目を超えて学びをつなぐことを一層大切にしたいと語る。

「『この前、あの教科で学んだね』といった声かけを教師全員が行うことで、学校全体で情報活用能力を育成していきたいと思っています」

善本校長は、自らの役割をこう語る。「管理職には5年先、10年先の本校や社会を見据えた上で、今必要な教育を示すことが求められます。その観点から、情報活用能力はこれからの社会を生きる上で不可欠な力であると確信しており、今後も自信を持って取り組みを推進していきたいと考えています」

\*2 同校は、学校図書館を様々な学びの中核となる施設・設備と位置づけ、「Learning Hub」と呼んでいる。